

素敵な未来を創るまちづくり

VOL.
1

～誰でもまちを素敵に変えられる～

特定非営利活動法人あわ・未来創生社（徳島県阿波市）

2025.12.15

まちづくり活動の「はじまり」

井原さんのまちづくり活動は、旧阿波町役場職員時代、伊沢公民館に配属になった頃から始まった。井原さんは社会教育主事の資格を取得し、まちを良くするために何かやろうと考えていた時、「バーベナ・テネラ」という花に出会った。バーベナ・テネラとは、耐寒性と耐暑性の強い常緑多年草で、春先から12月ごろまで、小さく可憐な花を咲かせ続ける。井原さんは「まちをこの花でいっぱいになりたい」と思うようになり、個人で地区内に花を植え始めた。その姿を見て、まちの人も協力するようになり、「花いっぱい運動」として、まちぐるみの活動に広がっていった。

「その頃、全国の自治体職員のうち、まちづくり活動で目立っている女性職員は2人しかいないと聞き、これはチャンスだと思った」と振り返る。チャンスはすぐ現れて、全国各地から視察や講演依頼が始まり、井原さんが多くの自治体を知る絶好の機会にもなった。

井原さんたちの花いっぱい運動が大きく花開いたのは、平成2年に大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」に、阿波町からバーベナ・テネラ園を出展させたことだという。井原さんは、プロデューサーとして、住民と役場、そして阿波町出身者などをまとめ、感動的で素晴らしい出展を成し遂げた。

その後、井原さんのまちづくりへの情熱はますます熱くなり、本格的にまちづくり活動をしようと、平成9年3月で役場を退職し、「イタリアンジェラート・ドルチェ」をオープンさせた。また、同年に住民団体「環境フォーラム」を組織して環境問題に取り組み、平成12年にはグリーン購入ネットワーク主催の「第3回グリーン購入大賞最優秀賞」を受賞した。

町の存続危機！？～まちづくり未来会議の発足

平成26年7月、増田寛也氏を中心とする日本創成会議は全国の896自治体を「消滅可能性都市」としたリストを発表した。この中には阿波市も含まれており、20年後の阿波市の人口は、15歳未満が人口の10%を下回り、高齢化率が40%以上と、極めて深刻なものと予測された。

これを見た井原さんは、「このまちの未来はどうなるのか！？」と、強い危機感を覚えるとともに、未来を担う子どもたちにまちの魅力や良さを知ってもらい、戻ってきたくするようなまちにしなければならないと感じたという。

そこで、平成27年にまちの有志に声をかけて「まちづくり未来会議」を設立した。この会議では、阿波市内にあるショッピングプラザアワーズ（以下「アワーズ」という）の周辺のまちの活性化について、ワークショップが重ねられた。その中で、アワーズの北側にある森を再生してはどうか、との意見が出された。その場所は、15年以上前に阿波町役場とまちの人によってビオトープが作られ、メダカやトンボなどの様々な生き物が共生する空間だったが、今では誰も寄り付かない森となっていた。そこに、未来を担う子どもたちが楽しく遊べる「ツリーハウス」のある公園を作ることになったのである。



完成したツリーハウス



森の図書館



妖精の村

この整備には、まちづくり未来会議のメンバーである造園家が中心となって、ボランティアや学生が多数参加した。令和2年までの間に2棟のツリーハウスが完成したほか、森の外れには600冊以上の蔵書がある「森の図書館」を含む、小さな3軒の家が作られた。

この整備を進める中で、車椅子の小学生に出会ったことで、井原さんは「年齢や障がいの有無に関わらず、みんなの遊び場にしたい」と考えるようになったという。

そこで、車椅子の小学生にアドバイザーになってもらい、ダイバーシティ会議を重ね、整備計画の見直しを行った。そして、まちの人や企業から多くの支援や協力を得ながら、車椅子が通れるフラットな小道、車椅子のままで花が摘める花壇、スロープ、手すりや背もたれのあるブランコなどが作られ、子どもたちによって「妖精の村」と名付けられた。

こうして、地域を素敵に変えたいとの思いをもった人たちが整備したキッズガーデンは、公園財団主催の「公園・夢プラン大賞2021・実現した夢部門」で、見事、最優秀賞に輝いた。

特定非営利活動法人あわ・みらい創生社の誕生

「素敵で楽しいまちになれば、新たに人がやってくるに違いない。市外に出た若者も戻ってくるだろうし、新たな仕事も生まれると思う。人口減少は止められないけれど、素敵な未来を創るために活動していけば、予測よりも人口は減らないかもしれない」と考えた井原さんは、平成28年5月に「特定非営利活動法人あわ・みらい創生社（以下「創生社」という）」を設立した。

創生社では、「素敵な未来を創ること」を目指して、以下の3つの事業を実施している。

①まちづくりに関わる人々が増える事業

地域づくりに関する講演会やセミナーをはじめ、子どもたちの素敵で楽しいまちづくりプロジェクト（通称：キッズまちプロ）などを実施。キッズまちプロでは、まち歩きマップ作成のほか、空き地を活用した公園づくり、マルシェでの販売体験などを行っている。子どもたちにとっては、まちづくりに参加することにより、まちを考える機会となっている。

②地域ビジネス支援事業

実店舗を持たないハンドメイド作家を支援するため、「イタリアンジェラート・ドルチェ」店内での雑貨の販売のほか、ツリーハウスの森での「森のマルシェ」などを実施。

③まちの魅力を発信する事業

アワーズでの寄付付き商品の販売により、企業や消費者から寄付を集め、それを子育て支援に活用してもらう「エシカル消費&CSRで子育て支援事業」を実施。また、市内の住民活動のSNS配信なども行う。

設立当初の平成28年度は、（一財）地域活性化センターの「地方創生に向けてがんばる地域応援事業」の助成金の採択を受け、地域づくりの講演会やセミナー、体験ワークショップなどを実施した。当時のことについて、井原さんは「法人設立時に120万円の助成金をいただいたおかげで多くの事業を実施でき、法人の礎となる良いスタートをきることができた」と話す。

その後は、阿波市観光協会や徳島県社会福祉協議会の助成金のほか、クラウドファンディングや企業からの協賛金などを活用して事業を実施している。法人の自主財源は多くはないが、井原さんたちのまちづくりへの思いに共感し、人が人を呼び、一緒に活動してくれるサポーターが大勢いるからこそ、活動の幅が広がり続けている。

まちは誰でも素敵に変えられる

井原さんは、「人のやる気が出るのは、自分の好きなことや興味のあること。それとまちづくりを組み合わせれば、楽しさや生きがい、自己実現につながるし、まちが素敵に変わった結果、関わった子どもたちや大人の心にシビックプライドが芽生えた」と話す。

創生社の活動は、着実にまちに変化を生み出している。例えば、キッズまちプロの事業で、空き地だった場所にハーブを植え、手作りのベンチやサイクルスタンドを設置したことにより、ハーブの香りが漂う素敵な公園（サイクルステーション）に生まれ変わった。また、ツリーハウスの森での芝生張りや自作のミュージカルの発表など、大人と子どもが一緒にまちづくりを進めてきた。

また、キッズまちプロに参加した子どもたちの「まちづくりは大人にしかできないと思っていたが、子どもでもできることがわかった」「自分たちでまちを素敵に変えていくにつれて、どんどんまちへの愛着がわいてきた」「私にもできた！と嬉しくなった」などの感想をみると、子どもたちの考えや行動も変わってきたことが感じられる。



妖精の家のペンキ塗り作業

まちづくり活動ほど、面白いものはない



子どもたちが作ったハーブとベンチの
サイクルステーション

井原さんは創生社だけではなく、環境問題やシルバーエイジのボランティア、複数の団体の代表や事務局を務め、様々な視点からまちづくりに関わっている。

「まちを素敵に変える活動ほど面白いものはない。最高の趣味を持ったと思う。いろいろな人と関わり、助け合い、イノベーションを起こす。こんな幸せな人生はない。まだ余力があるうちに、やりたいことがたくさんある」と、井原さんは目を輝かせながら話す。

井原さんの今後の夢は、まちづくりのレシピ本を出すことだという。「まちづくりの課題は地域によってテーマは異なるものの、根底にある思いは同じで共通点も多い。まずは、自分のまちを思う気持ちがあったうえで、そこに方法と材料を考えて、まちを作っていくのだから、まさに料理のレシピのようなもの。私のこれまでの経験で得たことをわかりやすく伝えたい」と考えているとのことである。

自分のまちを良くしたい、という視点をもってまちを見れば、歩道も森も空き地も空き家も、すべてが「資源」となる。その資源を生かして、地域の人が楽しんで参加できるような仕掛けを創っている井原さんは、まさにまちづくりの「演出家」である。これからも、素敵に変わり続けるまちを注目し続けたい。

♪まちづくり人(びと)からのメッセージ♪

特定非営利活動法人あわ・みらい創生社代表理事 井原 まゆみさん

この頃、地方は人口減少でざわざわ。こんな時こそ出そうよ、「まちを良くする」馬鹿力。まちは生き物、まちは舞台。あなたの好きなことや得意なことで演じれば、魅力あるまちに必ず変わる。大人も子どもも一緒になって少しずつまちを素敵にすれば、やんわりとシビックプライドを持つ市民が増えてくる。あなたがまだ何もやっていなければ、今日をスタートに、さあ！まちへ飛びだそう！

